

三輪 是法 学位（博士）請求論文審査報告書

論文題目：近現代日本における日蓮信仰の研究

鎌倉時代には、新たな仏教宗派が次々と成立した。法華経を拠り所とする教義を打ち立てた日蓮（1222—1282）を祖師と仰ぐ日蓮宗（法華宗）もその一つで、日本仏教の中に確固たる位置を占めている。この日蓮にはじまる信仰（以下、日蓮信仰という）は、近現代においても多くの人々に影響を与え受容されていった。それは、日蓮宗という宗派や、教団の枠組みを超えた広がりを持つものである。本門仏立講や国柱会をはじめ、多くの在家主義の組織や教団が生み出されていった。

この様な日蓮信仰の広まりが近現代において何故に起こりえたのか、その様相については、日蓮教学・教団史はもとより、様々な視点から研究が進められた。そこでは、主に信仰者の行動や思想を解明することや、時代や社会背景の中に位置付けることが目指されてきた。論者はこれらの先行研究を基礎に置きつつ、信仰者による法華経や日蓮の教えの受容のありかたを検討した。その際に、信仰者自身が自らの人生を法華経や日蓮の言説（遺文）の中への位置付けようとする言説を分析するという興味深い手法を導入した。仏教経典や開祖・祖師の言葉といった聖典は「物語（narrative）」的役割を持つ。論者は、「物語」は心理的・宗教的効果を持つもので、現実世界の中に生起する現象の説明原理となるという。物語の特性は、筋立て（プロット）をもつ説明体系であって、信仰する人間の人生に一定の方向性を与えてくれるものであると位置付ける。この「物語」を指標として、対象となる人物の言説の分析を精神分析的に進める。対象として取り上げたのは、社会的にも大きな影響力を發揮した在家信仰者である。

本論文は、序章、本論六章、終章から構成されている。

序章では、近現代における日蓮信仰に関する研究史を概観する。その上で、問題の所在を明らかにするとともに、本論の研究方法を明示する。

第一章「近代初頭の日蓮信仰」では、長松日扇（清風、1817—1890）を取り上げる。長松は近代初頭の日蓮仏教の信仰者であり、本門佛立講（現在の本門仏立宗）を開創した人物である。長松は、自らが回想し法難期と名づけるように、32歳の出家から59歳までの間に、周囲からの讒言が原因で転居が繰り返されており、日蓮との同一化を意識することによって、負の要因を法悦と自覚へと深化させた。長松の苦難が現証としてあり、それを法華経と日蓮、さらには門祖日隆の言説という文証によって相互媒介的に真実として証明していく。また、講衆が体験する数多くの病氣治しという靈験も現証としてあり、こうした靈験談によって長松はもとより、講衆も信仰の正当性が疑いないものとして強化されている。つまり、強化された日蓮信仰が「物語」として共有され、講の組織を堅固なものにしていく一方で、長松の信仰も不退転となり、外に対して熾烈な折伏布教として実践され

ていったことを明らかにする。

第二章「近代における日蓮仏教と田中智学」では、近代において日蓮主義を主唱した田中智学（1861—1939）を取り上げる。田中は国柱会の創始者であり、高山樗牛や姉崎正治、石原完爾、宮澤賢治、妹尾義郎などに直接的、あるいは間接的影響を与えた人物である。田中は、一旦は出家したものの、父親から受けた法華信仰に基づいて、在家の「一個の信者」として日蓮仏教の理念の元で社会的救済活動を進めていった。還俗した理由は、日蓮宗教団内で共有化していた摂受という布教方法を正当化することに疑問を持ったためであった。田中は、日蓮に回帰することによって、近代における日蓮仏教のあり方を思索し、折伏という布教方法を行動化していったことを指摘する。

第三章「知識人にみる日蓮信仰」では、田中智学と交流をもち、文学者として日蓮に傾倒し、わずか31歳という若さで没した高山樗牛と、高山と深い親交を持った宗教学者姉崎正治（1873—1949）、さらに歴史学者上原専祿（1899—1975）を取り上げる。

高山は、家族関係や、経済的・身体的にコンプレックスに苛まれていたことが日蓮信仰に大きく関わりを持った動機である。特に、東京帝国大学を卒業した後、文筆家として活動し、ヨーロッパへの留学と帰国後の京都帝国大学教授への就任が決まり、将来を有望視されていた矢先に病いに倒れたことは、高山に大きな失望をもたらした。こうした状況下で日蓮に出会い、信仰していくことによって、高山は日蓮研究を生きる糧としていった。高山は、日蓮信仰により人生を肯定的に意味づけ、コンプレックスを超克していったと指摘する。

姉崎は、明治38年（1905）に東京帝国大学に宗教学講座を開き、日本における宗教学を確立した学者である。姉崎は、当初日蓮について否定的であったが、親友・高山樗牛の死後、日蓮研究の遺稿や日蓮遺文を直接読むことによって影響を受け、日蓮に魅了されていった。ハーバード大学時代に『法華経の行者日蓮』を出版したことは、姉崎の日蓮信仰が確固たるものになったことを象徴している。その信仰は、姉崎自身が高山の日蓮信仰を分析した結論と同様、日蓮が姉崎の身体に入り一体化するという精神的に深化したものだだったと指摘する。

上原は、ドイツ中世史を専攻して東京商科大学（現在の一橋大学）の教授となり、第二次世界大戦後の学制改革の中で東京産業大学（現在の一橋大学）学長を勤めた歴史学者である。上原が影響を受けた日蓮信仰は、養父母が信仰していた国柱会の信仰による。幼年期から法華経と日蓮遺文に浸る毎日で、上原は日常的に日蓮仏教に対する信仰心を体得していった。上原は大学人として、苦悩や、さまざまな屈辱と挫折を味わい、日蓮の言葉が癒やしの意味づけとして機能した。晩年、妻の死によって上原の信仰は内面に沈黙し、やがて死者が生き続ける責任が生者にあることを自覚し、釈尊と日蓮を自らの生命力にしていった。

第四章「軍人にみる日蓮信仰」では、佐藤鐵太郎（1866—1942）と石原莞爾（1889—1949）、

さらに若き軍人を突き動かし二・二六事件のクーデターの首謀者として死刑となった北一輝（1883—1937）を取り上げる。

佐藤は、海軍大学校教官を経て海軍中将まで昇進し、昭和6年（1931）に退役した軍人である。佐藤が日蓮信仰に関心を寄せたのは、日露戦争従軍の時期である。その後、自らの国防論が法華経と日蓮の安国思想によって正当であることを確信し、その信仰を深化させるとともに、軍備は国防を本義とするとの姿勢を強めていった。私生活では、娘の死に直面した経験から、信仰を深めている。軍人としての佐藤は冷静沈着、主知的印象が強く、日蓮仏教を信仰するようには感じられないが、死や生命については霊的・超越的に考えていた。佐藤の信仰は、倫理的側面が強いが、その根底には人間としての日蓮を崇拜し、日蓮への恋慕があったことを指摘する。

石原は、陸軍士官学校教官を経て関東軍参謀を務め、満州事変に関与したことで知られる軍人である。陸軍中将まで昇進し、昭和16年（1941）に退役した。石原の日蓮信仰は、陸軍幼年学校在学中に田中智学の著書にであったことに始まる。多読を習慣化していた石原は、田中の著書を読みあさった。私的生活においては、妻との関係に日蓮信仰があり、日本国に共に尽力する同士として生きるという禁欲的關係を持続させた。石原は、日蓮のことばを規範的に受け止めていたが、交流があった年上の佐藤鐵太郎とは異なり、折伏によって世界統一を実現しようとした。石原の人生は、日蓮仏教を倫理規範とする日々だったと指摘する。

北は、中国の辛亥革命に参画するなど国際的混乱期に社会改革運動に関与する一方で、軍人ではなかったが二・二六事件の首魁として陸軍軍人に大きな影響を与えた人物である。北の日蓮信仰は、革命思想とその動向に確認できる。辛亥革命の頃から法華経の信仰を深め、幼年期から強かった靈感と一致して、精神的に日蓮と深く繋がった。すなわち、北は日蓮信仰によって、自らの革命思想を正当化し、日蓮の『立正安国論』を規範として革命を実行へと移していったと指摘する。

第五章「教育者・社会活動家にみる日蓮信仰」では、牧口常三郎（1871—1944）と戸田城聖（1900—1958）、さらに宮沢賢治（1896—1933）と妹尾義郎（1889—1961）を取り上げる。

牧口は、教員であったが、創価教育学会（後の創価学会）を創立した。牧口は研心学園校長の三谷素啓との出会いを契機として、昭和3年（1928）に日蓮正宗に入信した。牧口は、三谷の著『立正安国論精釈』によって、法華経の真理が我々の日常生活に密接に関係し、全宇宙の道理であると認識する。牧口の宗教思想に基づく革新的な教育論は受け入れられることはなく、同業者の嫉妬を覚悟しなければならなかった。牧口にとって法華経と日蓮遺文は、教育改革を推進させる理証と文証となり、自らの教育論の正当性を理論づけ、更に自ら教育改革を目指す同士たちの規範となっていたことを指摘した。

戸田は、牧口の創価教育学会を引き継いで戦後に創価学会とし、日蓮系新興宗教として

発展させた。戸田は、娘さらに妻と相次いで死別したことから死について考えるようになり、日蓮仏教と出会う。戸田の実経験は現証として、法華経と日蓮遺文は理証と文証として、相互に真実性を証明することで会員を導き、信仰を深めるように働いたと考えられる。戸田は、罪業論、幸福論、生命論などを説いた。戸田にとって日蓮仏教は、教団を維持させる規範であり、自らの人生においては負の出来事を正へと転換する物語であったことを指摘する。

宮沢は、『銀河鉄道の夜』や『雨にもマケズ』で知られる童話作家・詩人であり、採石工場の技師などを勤めた。宮沢の日蓮信仰は、高山樗牛と類似している。父親との確執、不甲斐ない自分との戦いを契機としていたと考えられる。法華経は宮沢にとって負の要因を転換せしめ、法華経によって父親へのコンプレックスも克服した。法華経と出会った宮沢は、田中智学の国柱会に入会する。ただし、妹トシの死に対しては、宮沢自らが詩や物語を紡ぎ出すことによって克服していった。晩年に農民運動を起こした宮沢は、自らを菩薩になぞらえた実践者であったのであり、日蓮仏教が規範としての役割を果たしていたことを指摘した。

妹尾は、新興仏教青年同盟を組織して仏教改革運動を進め、戦後には社会主義的活動を行ったことでも知られる。妹尾は、母の死、病との格闘、兄弟の不幸という、負の事件が続く中で、日蓮信仰を堅固なものとし、出家する。妹尾が経験する負の出来事の意味づけは日蓮仏教によってなされ、妹尾家が謗法の罪を犯しているからであるという自覚にいたって、家族の改心に努めるようになる。妹尾の信仰が深化する原因には、題目修行の効果によって健康な身体が戻ったことも想定されると指摘する。

第六章「近代日本における日蓮信仰と久遠の生命論」では、法華経に説かれる久遠の解釈を天台智顛と日蓮に確認し、さらに近代日本における信仰者が、久遠という時間の中で生命をどのように捉えたのかを考察する。田中・佐藤・戸田の久遠の生命論は、死を積極的に認めた上で生の尊厳を問うのか、霊的存在として生を継承させるのか、それとも宇宙的大きな何かと同一としてみるのか、というものである。そこには、生命に関する倫理的問題についての答えを、日蓮仏教によって見いだすことができるのではないかと考えられる。

終章では、本論全体をまとめるとともに、課題について指摘する。各章で取り上げた人物について、日蓮信仰が癒しの意味づけとして働いた事例は、長松、高山、上原、佐藤、戸田、宮沢、妹尾の言説に確認できる。日蓮信仰が規範的意味づけとして働いた事例は、軍人の信仰、佐藤、石原、北に確認できる。知識人である高山や上原の日蓮信仰からは、日蓮が研究対象となっていたことも確認される。

長松、田中、牧口、戸田の新興教団を立ち上げた四人には、自分たちの経験を現証として日蓮仏教の正当性を証明し、次の人間に物語として共有させ、機能させるという物語の連鎖について、可能性が確認できる。この連鎖については、それぞれの教団における信者

たち信仰告白を確認しなければならないと述べる。

以上、本論文は、近現代における日蓮信仰について、それぞれの課題に従って検証していることが確認できる。特に代表的人物を12名と多岐にわたり取り上げ、グループ化して特徴を抽出したことは、貴重な成果である。以上のことから、本研究は、今後の日蓮教団における思想研究のみならず、仏教思想研究に大いにも寄与するものであると評価できる。

なお、本論文の審査に際しては、文学研究科の内規により、令和2年1月27日に公聴口頭試問をおこない、論者の向学とその力量の确实なることを確認した。

よって、本論文は博士（文学）の学位を授与するに相応しいと審査委員会は判断し、これを認定する。

令和2年2月1日

主査 立正大学大学院文学研究科仏教学専攻

教授 寺尾 英智



副査 立正大学大学院文学研究科仏教学専攻

教授 安中 尚史



副査 東京大学大学院人文社会系研究科アジア研究専攻

教授 蓑輪 顕

